

江渡 狄嶺（えと・てきれい）

1、プロフィール

思想家。トルストイの影響で武蔵野に帰農、実践と思想の統一を目指し、宗教・哲学・芸術にわたる思索を行ない、晩年、包括的思想である「場」の論に到達した。

<生没>

1880(明治 13)年 11 月 13 日 ~ 1944(昭和 19)年 12 月 15 日

<代表作>

農業随筆集『或る百姓の家』『土と心とを耕しつつ』『地涌(ちゆう)のすがた』
農業哲学『場の研究』

<青森との関わり>

三戸郡五戸村(現五戸町)生まれ。東大在学中、郷里出身者と学生寮精神窟を営む。晩年「場」の論を郷里で講演。

2、作家解説

本名は幸三郎。明治 27 年青森県尋常中学校八戸分校入学。第二高等学校大学予科入学。同 34 年東京帝国大学法科入学。同 35 年から 40 年まで雑誌「日本人」(後に「日本及日本人」と改題)に評論を投稿。すでに高等学校時代から心酔したトルストイに次ぎ、この時期クロポトキンの影響も受け、帰農の意思を深める。新井奥邃・吉田清太郎(受洗の師)、清沢満之らの宗教思想家を知り、クリスチャンとなる。明治 44 年豊多摩郡千歳村(2年後高井戸村に移り定着)に移り、小作百姓となる。この頃、カソリック系修道会の聖フランシス、ブラザー・ローレンの清貧・敬虔性に深い関心を抱く。これが家庭学校の基礎形態となった。一方、キリスト教系社会主義者石川三四郎・渡辺政太郎、アナーキストの宮嶋資夫らとの交渉があった。

大正10年前後から、彫刻家高村光太郎・高田博厚、小説家水野葉舟、画家柳敬助らとの交流があり、それがロダンを主とする芸術論の摂取を導き、生命論的、現実主義的傾向を深める。それが後の著作の芸術的持ち味の因となった。

大正11年11月『或る百姓の家』を総文館から出版。同13年4月『土と心とを耕しつつ』を出版。同年10月から翌年3月までアメリカに渡り視察。昭和2年民族自己の道建設社を創設する。この前後から「場」の思想の構想が始まり、しだいに醸成されていく。同思想は郷里および長野などの講演で提唱される。と同時に、道元の正法眼蔵もしばしば提唱の対象となった。昭和14年10月『地涌のすがた』を青年書房から出版。

昭和16年6月第1回場論研究会を開く(第30回、昭和19年10月まで継続)。

19年12月15日伊豆の黒豆庵で、腸捻転のため死去。

没後の昭和33年12月『場の研究』(山川時郎編)が平凡社から出版される。

3、資料紹介

○『或る百姓の家』

図書

1922年(大正11)年11月18日

195mm×135mm

第一著作集。農場を百姓愛道場と名付け、百姓生活に入ってから12年目に刊行したもの。現在から将来にかけての生活の建築のアウトラインを記した「或る百姓の家」、生活の根拠理由を記した「或る百姓の良心」等の内容よりなる。序は武者小路実篤。